

東北は、宗教文化遺産の宝の山である。

— 奥会津からの真言寺院聖教との比較 —

名古屋大学名誉教授・龍谷大学文学部教授 阿部 泰郎

龍谷大学の阿部と申します。一昨年、このフォーラムで講演を務めさせていただきました。実はそれ以前から渡辺さんの活動を通して、この深浦円覚寺のことは伺っておりまして。その一端を実際に拝見しつつ、お話しすることのできる大変すばらしい機会をいただきました。それはちやうど、私が前に勤めていた名古屋大学の人類文化遺産テクスト学研究センター、ひいては、名古屋大学の文学研究科と弘前大学の人文社会科学部との交流協定にもとづく最初の研究交流として行ったものです。そのときに初めて深浦の円覚寺聖教の一部を見せていただきました。それがこのたび県の重宝に指定されるという大変うれしい機会にまた改めてここでお話しする場を得て、本当にありがたく思っております。

この深浦とのご縁をいただいたときに拝見させていただいた資料を元に、そのときの成果としても報告してお手伝いをさせていただいて、それを通していろんな発見を私自身も得たのですが、なんとしても、円覚寺と深浦へお訪ねして、その聖教が、また様々な資料が伝わった世界を実際に確かめてみたい、そこで本を拝見したいと念願していたのです。その後、皆様もご承知のとおりのコロナ禍の状況の中で、どうしても今まで深浦へお伺いすることができず、大変残念な思いをしております。

本来であれば、深浦の円覚寺聖教を自分でも見て学ばせていただいた上でお話をしたいと思っていたのですが、叶いません。その代わりに、私が今唯一、聖教調査で本格的にお手伝いをさせていただいている、同じ

東北のうちですが、南東北の奥会津の只見町の聖教調査のお話をさせていただくことで、これを深浦円覚寺と比較するという形でお話をしてみたいと思っております。

まず最初に、東北における宗教文化遺産というのは一体どういうものかとイメージしてみますと、多くの方々は、例えば、平泉と金色堂、「五月雨の 降り残してや 光堂」と詠まれる平安寺院とその中心の建築を、これは世界遺産にもなっておりますけれども、想い起こされるかと思えます。また一方で、例えば、青森というところ、あるいは、北東北から見てみれば、観光地としても有名な十和田湖、実はこれに大変不思議な龍神伝説がございまして、南祖坊なんそと言われるお坊さんがはるばる播磨書写山からやってきて、ここに修行して、湖の主である龍神龍女と契りを交わして永遠の命を得るという大変不思議な物語が伝わります。今でも十和田湖では南祖の伝説が生きており、ももとの主の龍神と戦って勝利するわけですが、敗北した龍神は八郎瀧に逃げたという、この地域全体の世界観に関わるようなお話ですが、これは室町時代の近江の国で成立した仏教説話集である『三国伝記』の最後の巻に伝えられている大変古い話であって、渡辺先生が専門に研究されている天台寺院の談議所、学問所のネットワークを通して広く伝わったお話です。そして、これは現地の青森でも十和田湖のふもとの斗賀神社とが、元は靈験堂という神仏習合の修験霊場の縁起として語り伝えられている伝承です。こういった伝説・伝承の世界も私は宗教文化遺産だと捉えているのですけれども、それを継続して支え続ける、『三国伝記』もその一環を成していた寺院の資料、すなわち深浦の場合もそれにあたりますが、我々はそういった宗教文化の豊かな所産と、その背後にある世界を、そうした資料を通して知ることができます。

このような文化の所産とそれを生みだし伝える世界はまさに全国至るところに存在しているわけですが、その中心となるのは、単なる經典と

か古文書などだけではなく、実は先ほど渡辺先生のお話にあった、知の基盤となるものは聖教と呼ばれる、じつに膨大な宗教テクストの遺産がその中核となっていたのです。そして、その遺産としての価値を明らかにするのは、ただ貴重なものを一つ二つをピックアップするだけではない、つまりお宝だけを取り上げるのではなく、この円覚寺の調査のように、すべてを悉皆調査という形で目録にして記録するということを通してその全体像を明らかにすることによって、初めてその真価が現れるものだと思います。

こうした聖教の代表として、円覚寺とのつながりが指摘されている中央の大寺院、それから、地方の中心となるような寺院、こういったもののそれぞれの拠点となる寺院に伝わっている聖教が今、改めて注目されて、次々と国宝になっていきます。先ほど触れられたように、醍醐寺の七万点に及ぶ聖教、これがすべて、一世紀にわたる調査の末によく一括して指定へとたどり着きました。あるいは、関東では横浜の金沢称名寺、金沢文庫としても有名ですけれども、これも県立金沢文庫の半世紀以上にわたる調査の末に二万点にわたる聖教が国宝になりました。このように今、全国的には聖教と呼ばれる寺院に伝わる宗教文献が大きな遺産化の対象となって光を当てられています。

こういった聖教の在り方というのは、決して醍醐寺のように中央の大寺院だけに存在するものではありません。例えば、醍醐寺と並んで京都の御室仁和寺の聖教も、現在、国宝化へのプロセスが進められているところでありますが、実は中世につくり上げられた仁和寺聖教の中核の部分は、先ほどの金沢称名寺の聖教が形成されるにあたって、まさにコア、核となったものに他ならず、この仁和寺と称名寺の聖教を私も昔調査に携わらせていただいて、その価値の発見のお手伝いさせていただいたという貴重な経験がございます。

それとともに、名古屋で現在も調査を続けている、先ほどお話のあつ

た『国宝古事記』の伝わっている大須観音、こちらも深浦と共通する密教の聖教、醍醐寺ともつながる真言聖教が中心となっている経蔵であるわけですが、大須観音の一万五千点に及ぶ宗教文献の中心をなしたのは、実は大仏のある東大寺の東南院という門跡から移された聖教典籍がコアになっているということが明らかになってきました。実は中央と地方の寺院は、ネットワークと言われますように、そういう法流を相承するつながりの中で互いに聖教という書物の書写による伝来を通して形成されていったということが分かってきております。

こうしたネットワークは、例えば、大須観音でいえば、東西の交通の要めに位置する大須に集められた密教の聖教は、全国からこの学問所に集まった皆さんの学僧たちによって地方に移され、そこで伝えられることになりました。今、香川県覚城院という寺院聖教の調査が盛んに行われて成果が出されておりますけれども、そこからは大須にあった聖教そのものが発見されており、まさにダイレクトにつながっていたということが分かっております。

そして深浦の場合は、醍醐寺の聖教が円覚寺から新たに発見されました。元は醍醐寺にあったものがそっくり、それも非常に重要な聖教類が円覚寺に伝わっています。これが一つの大きなサプライズであったわけですが、それは一体なぜか、そして、その聖教とは一体どんなものなのかという問いが生じます。こういった問いを尋ねていくことによる新たな探求、これは玄人も素人も隔てなく、一体なぜだろうというクエスチョンこそが、これからの更なる探求と発見のきっかけになっていくと思います。

その解明のための手がかりとなる大きな流れがあります。真福寺の例でいいますと、より直接的な中央、つまり中心がありました。醍醐寺や高野山と並んで中世末期まで大きな宗教勢力であり中央の拠点であった紀州根来寺は、秀吉によって滅ぼされるという劇的な終わり方を迎える

わけですが、しかし、今でも大塔という立派なモニュメントが残っております。これが象徴するように、実に大きな権威を持ち全国にネットワークを広げた寺院であって、根来を通して全国に様々な密教を中心とした、まさに知の世界体系が広がっていたということが言えるのですが、それはまた東北、東国にも及んでいたのです。秀吉が根来寺を滅した後、四散した学僧たちは幾つかに分かれて、長谷寺豊山と京都の智積院、これは秀吉が復興したのですが、智山に入っていく。この二代目の能化、智山第二世となりましたが、智山という学僧は、東国下野の出身でありまして、大正大学の坂本先生が詳しい年表を作っておられます。彼の基盤となったのは東国、それも北関東でした。

その祐宜のもとで書写に携わった祐俊という学僧の書いた写本、その中には祐宜の著作も多く含まれるのですが、その祐俊が残した真言密教の聖教を中心とする写本が、現在我々が調査をお手伝いさせていただいている奥会津只見町から膨大な量が見いだされました。それもちょうど根来が破滅する前後の中世末期、戦国時代の聖教が大量に出現して、その中にはそれ以前、はるかにさかのぼる室町前期の写本も幾つもあったのです。更にこれらの聖教が根来寺のネットワークのもとで全国的に形成された体系の一端であるということが分かって、それを円覚寺の聖教の在り方と比較することが出来ます。もちろん、近代になってからもたらされた朝鮮本や、幕末から明治にかけて円覚寺の寺僧の方々が形成された聖教とはまた違いますが、より古い醍醐寺のものがなぜあるのかということを考える上でも一つの補助線になるかと考えております。

そのときに一つ考えておきたいことは、同じ東北とはいえ、北東北の津軽半島のつけ根、いわゆる北前船の航路の風待ちの港という要所であった深浦という場所と、奥会津という福島県の、それも新潟に接する深い山の中、本当に同じ東北といっても北辺と南辺ともいえるかけ離れたところのように見えますが、いずれもある意味で共通点がありま

す。津軽深浦は北前船の航路という交通ネットワークの要、そして、奥会津は幾つもの街道筋がちょうど越後と下野から入ってくる江戸時代に往来の盛んであった街道によってつながれる、実は往来の極めて活発なところであったのです。海陸それぞれの交通の要の一角に中世の聖教のいわばアーカイブというものが残されたということの意味は、もっといろんな視点から捉えてみるべきだと考えます。

例えば、奥会津のことなのですが、会津は古代から徳一をはじめとして仏教文化の最先端が移入されたところで、例えば、恵日寺という磐梯山のふもとの古刹、あるいは、会津盆地の真ん中に勝常寺という今も立派な仏像を伝えるお寺があり、また、様々な霊場も多いところで、中世では熊野修験が入って喜多方の熊野神社長床は国宝になっていますが、そうした宗教遺跡がたくさん残っているところでもあります。それが、ちょうど秀吉の時代、戦国末期に伊達政宗が侵攻したことによって、会津のそれまでの中世的な秩序が一挙に滅ぼされました。そして、おそらく多くの寺院・神社が焼かれた。これは信長による比叡山焼打に代表される寺社宗教勢力の破壊、あるいは、秀吉による先ほどの根来攻めも同様に、中世的な秩序の破壊とおそらく共通するものであったろうと思います。しかし、そういう中で、戦国に入る直前ではありますが、室町時代に全国を活発に往来した、例えば、印融のような学僧がたくさん往来しており、政宗による大きな破壊と秩序の変革の最中も、先ほどの祐俊のような学僧によって営々と続けられていたということが分かるのです。

そうした歴史の流れをふまえると、先ほどの奥会津における只見町の真言聖教の発見は、どのような意義をもつのでしょうか。それまでの只見町では、いわゆる民俗文献、民俗資料、最初は職人巻物という民具の一端から書物に関する調査研究が始められ、それを担った久野俊彦さんのフィールドワークによって、ひいては国立歴史民俗博物館の小池先生

による修験文献、あるいは、陰陽道の文献の調査が進んで、それぞれが悉皆調査という形で取り組まれ、地域に伝来している修験文献、あるいは、民間所蔵文献の網羅的な調査研究が行われました。その過程の中で、『神皇正統記』という書物が出現しました。これも実は天正年間、秀吉の根来攻めの直後に当たるときに、北関東の足利というところで祐俊が写した書物の一つであって、只見町からオールカラーの本が刊行されました。詳しい解説をつけて、久野さんがすべて現代語訳をつけて紹介される大変大きなお仕事を今年出されたばかりですが、歴博のパンフレットが紹介するように、そこに至る大変長い間の調査研究の成果が積み上げられて、この大きな発見に至ったということになるのです。

これは深浦円覚寺の文化遺産の在り方とは全く対照的というか、時代的にも、調査・発見のいきさつも異なりますけれども、やはりキーパーソンがおりました。円覚寺の場合には修験道の復興にも尽力し、多くの修験文献を修験聖典のような形で集める、そういう役割を果たした義観のような働きをした人が奥会津の場合にも何人もいます。おもしろいことに、そのうちの一人は醍醐寺のお坊さんであります。醍醐寺光台院の亮淳という人が戦国時代に奥会津を含む南東北に法流を伝えるためにやってまいりまして、そこにまた祐宜や祐俊が関わり、共に活動して密教の流れを伝える大きな役割を果たした、これも街道筋のお寺の一つ、南会津町の龍福寺というところの資料にも、この亮淳の足跡と、祐俊たちが写した聖教が残されていて、つまり、これは一つの寺だけではなく、奥会津の地域全体にわたって広がっていたのです。祐俊のものだけでなく、二五〇点をおそらく超えるくらいの資料、中世聖教全体だともっとたくさんありますし、近世のものも含めれば、三〇〇〇点をはるかに超えるだろう。修験も含めればもっと多くなるわけで、深浦円覚寺の文化財になった数と匹敵するくらいの大量な資料を残し伝えているものと言えます。

私がお縁をいただいで円覚寺の資料の中で調査をさせていただき、報告書の第二集で紹介をさせていただいた聖教は、醍醐寺に伝わった『御遺告口決』です。この「御遺告」というのは空海の最後のメッセージということなのですが、これは真言密教ではとても大事な、縁起というか神話のような扱いを受けており、これ自体が聖典になっているのですが、それについての秘伝です。著者は南北朝時代の真言密教僧で後醍醐天皇のために尽力した、そして、真言密教のトップにまで昇り詰めた文観僧正の著作で、後醍醐天皇のために書かれた御遺告の注釈です。その写本が醍醐寺に残されて、それが円覚寺に伝わりました。文観が書いた原本とそう隔たらない南北朝初期の写本、私にとってはこれは大変な新発見でありました。文観の著作は幾つかのシリーズを成しており、その中でもっとも中核を成すのがこの「御遺告」関係の聖教です。その中でもこれがまさに中核、鍵となるテキストだということが分かりました。さらに、これに図像を加えて、より発展させたテキスト『御遺告大事』と合せて大きな体系をなすということが分かってきました。なんといってもおもしろいことは、今、醍醐寺に残されているのはこれの江戸時代の写本です。そして、その原本になったのが円覚寺の本なので、円覚寺のほうがかもと醍醐寺に伝わったオリジナルといってもよい本です。底本が円覚寺にあり、そして、転写本のほうが醍醐寺に残されている。私は醍醐寺の写本でこの内容をまず知ったわけでありませうけれども、この原本を見てびっくりしました。こんなサプライズが円覚寺の密教写本、特に醍醐寺に由来する写本の中に隠されておりました。おそらく円覚寺の醍醐寺由来の写本全体がそういうもので、弘法大師の伝記のひとつ、経範の『行状集記』をはじめとして、醍醐寺にもともとあった第一級の中世聖教が円覚寺の醍醐寺由来の聖教のまさに中核をなしている、このことは一体何を物語るのか、先ほどのクエスチョンであり、また、サプライズの源です。このことはぜひ、皆さんと一緒に解明を試み

てみたいと思っています。

比較のために奥会津の方のサプライズとなる聖教を紹介しましょう。奥会津の瀧泉寺に所蔵される祐俊写の聖教のひとつです。私がかつて若い頃に調査を行いました御室仁和寺の「守覚法親王」という源平合戦の頃の門跡のトップに当たる後白河院の皇子のつくられた聖教の一部であります。その「御流聖教」と呼ばれる守覚法親王による最も大事な灌頂に関わる印明、ちゃんと手で結ぶ印の形が貼り紙に描かれてあります。そして、その伝来が奥書という形でこの書物の奥に、「守覚」の最後の識語、自ら目を労わって校合したという短い著作の識語から、その後、どう伝来したかということ、祐俊に至るまでどう伝えたかという流れがすべてこの奥書で分かります。そこからそういった書物の流れの歴史、伝わり方といった情報が浮かび上がってきます。奥会津の祐俊の聖教の価値というのは、実はこうした伝来がことごとく克明に記されているということにおいて分かるのです。わざわざ大事なところは朱で書いてあるということも興味ふかいところです。

それから、奥会津でしか残っていない、きわめてユニークな聖教もあります。『乾坤塵砂鈔』という禪と密教のコンプレックスつまり二宗が融合したような大変不思議な書物で、室町時代でなければできない密教の聖教ですが、他に伝本を見ない、天下の孤本です。表紙が大変きれいに装飾してあることも注目のポイントで、そのように大切な書物は装われているということです。

さらに、中世をさかのぼる聖教もありました。その一例として『御遺告釈義抄』の場合をみると、室町前期の応永年間にさかのぼる古い写本があり、これをまた祐俊は写して隣の金山町・常楽寺という別のお寺の聖教として伝わっているものが、地域全体の調査を始めることよって発見されました。それは、ちょうど円覚寺の聖教調査と同じくらいの時期でした。只見町瀧泉寺での聖教出現をきっかけにして奥会津全体の広

域の調査を行って、やはり同じような聖教を伝える寺院を、先ほどの龍福寺、あるいは、金山町の常楽寺、そして南会津町下山の観音寺、あわせて四つのお寺から大量の聖教が出てきました。現在、それら全体を統合するような目録を作成中ですけれども、その中で最も多く出てきた只見町の聖教の中には、祐俊をはるかにさかのぼる室町前期、それも天台の談義所として法流の灌頂を伝えた北関東の拠点寺院、世良田長楽寺において形成された天台密教の聖教『了因決』の永享年間の写本がありました。ほかの天台寺院でもこれほど古いものは残っていないのが、会津にそろって伝わっているのです。これを始め、なお驚くべき発見がまだこれから幾つもあるであろうと予測されます。

奥会津の調査はなお進行中で、本格的な成果報告は久野先生や小池先生、歴博の皆さんのプロジェクトと名古屋大学、私が勤めております龍谷大学が連携した共同プロジェクトによって行う予定です。現在、龍谷大学では、こういった全国的な活動を支えるために大学の研究中枢である世界仏教文化研究センターに「宗教文化遺産アーカイブス研究基盤プラットフォーム」という機構をつくろうとしております。それは、各地域の聖教をはじめとする宗教文化の遺産の調査とそのアーカイブス化、記録を深浦円覚寺のプロジェクトとも連携しながら、互いに協力し合っ

て取り組んでいこうということを考えているところです。これが本格的に動き出せば、皆さんと共同して研究成果をもっと豊かに、いろいろな発見を共有することができるだろうと思います。まずはささやかですが、渡辺さんと歴民博の小池さんと、和歌山の県立博物館とが連携しながら、日本の各地域、渡辺さんとは津軽深浦、小池さんとは奥会津、和歌山県博の大河内さんとは紀州根来寺や高野山のある地域のそれぞれと、私を取り組んでいる奥三河や大阪、富山など各地域と、互いに交流し情報を共有しながら進めていくことを始めています。それも単に聖教文献だけではなくて、多様な形で生きた文化遺産、たとえば絵伝の絵解

きですとか、あるいは、絵巻ですとか民俗資料、民間に伝わる芸能、あるいは、寺院の中での法会や儀礼に用いられる仮面や道具など、いろんな文化の所産をすべて引つくるめて、その中には、例えば和歌のような資料も出てくるでしょう、それらのすべてが神仏のもとで結び付いている宗教文化の遺産であるという認識のもとに、様々な分野の専門家の力を結集してアーカイヴスによる文化の遺産化に取り組んでみたいと思っております。

そうした活動の方法として私が今、考えているのは、「4Rサイクル」と勝手に名づけて呼んでいるのですが、地域、地方、寺社、個人など様々なところで残されている人間文化のあかしが伝えられています。しかし、その多くが、先ほど三村先生のお話にあったように、儂くて、価値が認められない、興味をもたれない、関心を失ってしまえばあつという間に廃棄されて失われてしまう。そうでなくても、災害その他によって失われてしまうことが多いわけですが、そういった遺産をいかに我々が発見するか。専門家だけが発見できるのではなくて、まさに素人の方々が、これらは価値があるということをちよつとでも気がついて、そしてネットワークを通してそれが伝われば、ただちに我々が駆けつけてアーカイヴ化に取り組む。実際、奥会津では久野さんがそういう役割を果たされて、先ほどの大きな発見につながったわけでありますが、それを今度はみんなでレコード、つまり目録化し、データ化する、そういう記録の仕事をしながら、価値を解読し、解釈を通してそのもともとの意味やそれが伝わった世界を復元する、そういう再現や復元、つまりリプレゼンテーションする働きを研究者のネットワークを通して実現し、そしてまた、それが成果として、所蔵者やその地域の皆さんに理解できる形で還っていく。つまり、社会に開かれて共有されていくリパブリックなものになる。こういった流れ、それからまた新たな発見、救出につながっていくというサイクルを考えており、これを4Rサイクルと呼んで

います。その一步を、今、渡辺さんたちと一緒に踏み出しております。三菱財団の助成を得て始めたばかりのところですが、それを元に、もっと大きな輪をつくって取り組んでいきたいと思っております。

そうしたつながりを、北東北の深浦と南東北の奥会津との両方をまずつなぐということができればうれしいと私は願っているのですが、そういう未来への希望を込めて、私の話を終えたいと思います。ご清聴どうもありがとうございました。